

# 釣れ釣れなるままに

2016年思い出の釣行記 PART. 10

## 鹿島釣狂

### 【箸別川河口のサケ釣り】

娘がお産のため帰省した。私は3歳の孫の守りをする担当だ。ウルトラマンの怪獣になったり、ジュウオウジャーの敵役になったりして戦いごっこをするわけだが、手を抜いてしまうと喜ばないので結構体力がいる。なにより、必ず最後は負けなければならないのだから神経も使う。同年代で遊ぶことのできる保育園と同じようなことは出来ない。

岩見沢市にある「遊びの広場」では、入学前の幼児が体を使って遊べるようにと施設が整っている。遊び友だちも孫がそこで見つければよいわけだ。おのずとそこに通うことになった。

釣りの方もご無沙汰している。苫小牧のアナゴはどうなっただろう。箸別川のサケはどうだと気になっている。天気予報の方も気になる。台風16号で韓国には相当な被害が出た。その16号は日本を通過するようだが、どのコースを通るのだろう。どちらにしても、対応できる様にと道具の準備だけは整えておいた。

10月5日朝、天気予報を見ていると苫小牧方面は悪く、増毛方面がよくなっている。「増毛にサケ釣りに行ってくる」と宣言して、午後から出掛けた。午後3時には箸別川河口に着いた。釣りから上がってきた人に聞いてみると「もうそろそろよくなっているかと旭川から来たが、さっぱりだった。雄冬漁港がよいという話なのでそちらに向かってみる。」という。

河口の左側に投げ釣りで1名、川の流れに沿ってのウキフカセで1名、ウキルアーで1名の釣り人がいたが、釣果は上がっていない。私もウキルアーを飛ばしてみるが全くサケの気配を感じる事が出来なかった。

留萌から来たウキルアー師が言った。「去年は18日間通って1本。今年はまだ既に23日間通って1本しか上げていない。9月からだからほとんど毎日ということになる。今年のサケは全く不漁のようだが、する事もないのでここに通っている。仲間は結構釣っているのだが、1日に1本出ればよい方だ。あんたどこかで見たことがあるなど思っていたが、以前「北海道のつり」でこのサケ釣りのことを書いていた奴だな。あの年はサケがほんとうによかったよな。昔は、留萌港でもカレイやホッケがバクバク釣れたもんだ。今年はイワシがよかった。私は釣れないことの方が多いのだが、家族が喜んでくれるとなれば頑張れる。暗くなってから帰っても女房を起こしてしまうことになるので車中泊して明日の

朝も頑張ってみるよ。」と場所確保のための三脚を立てた。

5時頃よりウキが見えづらくなった。望みはなさそうだが、せっかく来たのだからとウキに電ケミを装着して、アワビブルーと今日買いそろえたハリに取り替えてしばらく粘ってみた。しかし、サケからの便りを受け取ることは出来なかった。なんだかんだいって毎年サケを釣ってきたわけだが、今年はサケの顔を見ることはないのだろう。帰りは高速を使わず、カーナビを一般道にセットした。

### 【岩見沢釣遊会第6回大会】

岩見沢釣遊会第6回大会が10月15日（土）、三石道の駅～様似港で開催された。波が1m、風も穏やかで、絶好の釣り日和となった。私は当初の予定通り幌島で下りた。幌島では前回大会の好釣ぶりを考えてか、片岡、山田、堀内氏が一緒に竿を並べた。入釣してまもなくアカハラとカジカが来て2魚種5匹はそろった。2時の満潮に向かって潮が混んできているので期待はしたが、何せ型が小さい。根掛かりもやたらと多い。左隣に入った片岡氏に様子を伺うと45cmほどのカジカを手にしていて、右隣の堀内正博氏にも40cmほどのものが上がっていた。同じような条件下で釣りをしているので自分にもいつかは釣れるはずだと、明け方まで頑張ることにした。

しかし、干潮に向かって潮が引いてきているはずなのに、コマセが効いていないかのように魚が釣れない。片岡氏はもう1本大物カジカを抜きあげたところで、白泉の方へとアブラコを狙って行ってしまった。

私も月寒の方へと移動することにした。月寒では矢根氏が竿を出していたので、その隣りに入れさせてもらった。タカノハが来た。35cmを若干上回るぎりぎりのものだ。しかし、それより大きいものは釣っていないので、縮まらないようにと祈りながらバツカンに入れた。その後も、それを上回るようなものは遂に釣れなかった。

審査は、三石道の駅で実施した。優勝は、幌島から白泉に流した片岡氏だった。白泉ではアブラコはとれなかったが大物カジカを4本として重量を稼いだのだ。身長優勝は久保氏だった。様似港に入ったが釣りものはなかった。しかし、めげずに粘り強く打ち続けていると、明け方、彼の頑張りに応えてくれるように49.4cmの本アブラコが彼の竿を揺らしたのだ。準優勝、3位は月寒に入った西脇氏と矢根氏だった。先月の不調からは期待薄だったのだが、タカノハの代わりにカジカを大釣りしてきたのだ。私のタカノハは審査時には縮まって35cmに僅かに届かず対象外となってしまった。

釣りから帰った翌日は混声合唱団の定期演奏会がある。釣り道具をほっぽり出してすぐに前日練習にと市民会館に駆けつけたが、高い声が出ない。「上を向いて歩こう」の1番は、私の独唱のようなものだったから、悲惨だった。バス仲間に急遽応援を頼むことになった。本番では回復するかと思ったが、午前中の練習では前日より酷い状態で、午後の本番になんとか間に合った。そして、夜の打ち上げでは酒の量と共に絶好調になっていった。

さて、来月は今年度の最終大会となる。この絶好調を維持しながら大会に臨むことにし

よう。



身長優勝 久保達巳氏 アブラコ49.4cm



左から準優勝；西脇 浩、優勝：片岡 浩、3位：矢根政仁

# 釣れ釣れなるままに

2016年思い出の釣行記 PART. 10

# 瓜一っつ 鹿島釣狂

## 【小樽釣和会第4回大会】

5月に退職を記念した夫婦旅行で海外旅行に行ってきた。旅行先は一番手っ取り早く、日本語も通じるといふことでハワイということにした。珍道中だった。実際にはハワイ島、マウイ島で日本語がなかなか通じずに難儀した。特に入国手続きや荷物検査には戸惑い、何度もゲージを潜ることになった。ワイキキのあるオアフ島では、ようやく片言が通じるようになって慣れた頃に出国となったが、不安ばかりで決して快適な旅とは言えなかった。

唯一楽しかったのは、マリーナ散策で、カジキマグロ釣りの装備を備えた豪華ヨットが係留された港内を覗いていると、海底には様々な熱帯魚が泳いでおり、水族館のようだったことだ。また、ツアーの申込は私達の他に1組の夫婦だけだったが、そのご主人が小樽の釣り会に所属している山田雅志氏だったことだ。磯でルアーを引いたり、渚で投げ釣りの竿が立て掛けてあったりするのを見て、釣りの話になり、お互いの趣味が一致していることが分かったのだ。それも釣り会のメンバーだったことに驚いた。山田夫妻が3回目のハワイになるといふことで、様々なところで助けて頂き一緒に観光しているだけで心強かった。

後日、新聞の「釣り会成績」の覧を見ると、その山田氏が小樽釣和会第2回大会で3位に入賞していた。6月12日、歌島～栄浜大平盤、907点(1+7)だった。やるなあ！嬉しくなっちゃうなあ！その山田氏から小樽釣和会大会の案内が届いた。11月6日に第4回大会が開催されるとあったので、参加を申し込んだ。

今回の釣りに合わせて胴長を新調した。今までのものは、サスペンダーが伸びきってしまつて新しいサスペンダーに取り替えたり、穴が開いて水漏れしたのを何回も修繕しながら履いてきたりしてきたのだが、前回の6回大会で新たな水漏れがあつて、靴下や下着を濡らしてしまったのだ。

今回購入したのは、「フェルトスパイクソールPBBタイタニウムウェイダー」という代物だ。「完全独立気泡のネオプレーン・ラバー表面に、チタン合金を特殊コーティングし、

その上に合成繊維をラミネートした5層構造の新マリンスーツ素材です。軽く、動きやすく、快適、しかも安全なマリンスーツを実現します。」の紹介が気に入ったのだ。

早速、わが家で試着していると、4歳になったばかりの孫が寄ってきて、「ウルトラマンスーツ」みたいだと言った。孫もウルトラマンはスーツを着ていると知っていたのだ。

集合場所は小樽市役所駐車場ということで、午後4時には岩見沢を出発した。途中、娘婿を札幌大通りの結婚式場に送って、市役所には午後5時半に到着してしまった。バスの出発時刻午後8時までには余裕があるので、まずは夕食をとろうと、5号線沿いをウロウロした。その内に脇道に入ってしまった、急な細い坂道を上り、また下りになった。辺りは暗くなり曇りが降り出し視界も悪い。前方に大きなジープが停めてあった。右には軽自動車も駐車してある。その右に若干の広場があると思いそこでUターンしようと考えた。車を右に切った。ガツン！前輪がコンクリートの側溝にスッポリと落ちてしまったのだ。狭い道路なので行き交う車の通行の妨げになり、新たな事故を引き起こしてしまうのではないかと気が気ではない。すぐにJAFに連絡しているところで、大きなワゴン車（ランドクルーザー）が通りかかり「引き上げてやるか」と声を掛けてきた。集合時間には間に合わせたいこともあり、JAFを断ってお願いした。みぞれ交じりの雨が降る中、牽引ロープを繋いで一気に引き上げてくれた。後でお礼がしたいと名前や住所を伺ったが明かしてくれない。あまりにもしつこく私が聞くものだから彼も仕方なく私の携帯に電話番号を打ち込んでくれた。なにかと世知辛い世の中、彼の温かな言動に触れて、ほのぼのとした心持ちになった。

時間がなくなったので、コンビニ弁当で済ませようと市役所の近くのローソンに入った。すると、そこへ今回大会に案内してくれた山田氏が偶然入ってきた。「丁度よかった。駐車場に案内する。」というのをお断りして、まずはカツ丼とお茶で夕食を済ませた。

参加者が全員揃った。和気藹々とした気さくな感じでバスの人となった。私と山田氏は貝取潤に入る予定だ。荒れ模様の天気が続く、大会日が近づくにつれてさらに悪くなって、波は3mで北西の風10mとなった。釣り場は全て山田氏に任せてあるので、漁港もあるのかなと思って聞いてみると「大丈夫、今日の予定した場所は、南西の風には弱いが、北西の風には減法強いから。」ということだった。

稲穂峠をこえたあたりでバスのワイパーが動かなくなっていた。天気は回復傾向にあるらしい。貝取潤川の橋を渡ったところで、山田氏と共に下りていった。その前の磯は大波で打てそうにもない。川の右側方向の波が少し穏やかなようなので進んでいくと、なんとか釣りになりそうなところがありそこで準備した。すぐに小気味よいアタリが出てソイがきた。続いたアタリは根に潜られてしまったが、少し間を置くとカジカの方で外してくれた。どちらも30cmを超えたばかりのものだった。

山田氏の様子を見に行くと30cm上のソイを立て続けに3匹あげていた。背後に釣りバスが停まった。先週、ここで大漁したという御仁が山田氏に声を掛けてきたが、波の高さや二人で限界の釣り場をみて、違うところに釣り場を捜して行ってしまった。



時折、雪が舞った。着いたときは星空が出ていたのだが、星が陰ってくると粉雪が舞った。しかし、温かい。ネオプレーン製の胴付のお陰だろうか。冷えてくるはずの足元が温かいのだ。それとも着こんだ所為だろうか。腹に2枚、背中に2枚当ててきたカイロがとにかくぽかぽかなのだ。いつもなら指先が冷たくなってエサ付けなどに苦労するところが悴<sup>かじか</sup>んでこない。

その後、小カジカや小ゾイを追加していったが、根掛かりも多い。目を離しているうちに何か大物でも付いたのだろうか、道糸がふけて磯際の丸い岩と岩の間に引っかかってしまった。磯際は急な駆け上がりになっていて、大きな波が打ち寄せてくるので足下が掬われてしまいそうで近寄れない。仕方なく道糸を切る羽目になってしまった。

満潮時間帯になった。すると今まで続いていたアタリがぴたりと止まってしまった。夜が明けてからはアブラコ狙いで遠投を中心に切り替えた。根掛かりが多いと山田氏に打ち明けると、彼お手製の鉛をごそと置いていった。それからも釣果が上がっていない私を見かねてか、さらにイワムシを1パックおいていった。これでアブラコが来るのではないかと、そのイワムシを付けてカー一杯遠投したが、期待したアブラコは最後まで来ることはなかった。



山田雅志氏には何かと気を遣っていただいた



釣り場には時折雪が舞った



私の全釣果 カジカ4匹、ソイ6匹 漁師のカゴが落ちていたのでそれに入れてみた。





優勝の浜田重夫氏 小樽荒磯クラブ会長

檜山温泉で審査をしてから、温泉で汗を流し食事をいただいた。温泉も食事も会で持つてくれるという。手渡された賞品も持ちきれないほどだ。重量賞、魚種別大物賞、団体賞、ブービー賞のおまけ付きだ。それに加えてラッキー賞がやたらと多い。私の会だとすぐにも破産してしまいそうだと台所事情が気になった。1魚種+7匹重量で優勝は浜田重夫氏だった。宮野漁港外防波堤に入って大物カジカで重量を稼いだ。案内してくれた山田氏は準優勝だった。私は4位だった。会の人が「実際は3位なのだよ」と教えてくれた。3位までは会員に限定されているそうだ。

トントンと肩を叩かれた。小樽に着いたようだ。程よい疲れと温泉で温まった所為でぐっすりと寝込んでしまっていたようだ。小樽は大雪だった。車の傷はどうなっているのだろうか。無事に走れるのだろうか。バンパー部分に少し傷はあるがそれ以外には損傷がない



ようだ。無事エンジンが掛かった。メータにも特別変わったマークは付いていない。無事走れそうだ。

車に降り積もった雪を退けていると、見覚えのある娘さんが大会から帰ってきた人を待っているようだった。思わず声を掛けた。「山田さんと一緒に暮らしている娘さんですか？ 今日はお父さんにすっかりお世話になりました」娘さんは怪訝な顔をしている。すると山田氏がやってきて「ハワイで一緒になった仲俣さんだよ」と娘さんに伝えた。すると娘さんは「あれ以来、お父さんもお母さんも、『北海道のつり』を楽しそうに読んでいます」と話してくれた。実は娘さんとは初対面なのだ。山田氏の奥さんと雰囲気は全く同じだったので思わず声を掛けてしまったのだ。年格好は違っているが、その人が醸し出す仕草や表情は、ハワイで一緒だった山田氏の奥さんと全く瓜二つなのだ。親子とはこうも似るものかと感心してしまった。

道内は6日未明から、冬型の気圧配置の影響で、道北、道央地方などを中心に記録的な大雪に見舞われた。札幌市中央区は同日午前にも23cmを観測し、11月上旬としては21年ぶりに20cmを超えたというのだ。

小樽から高速に入った。すると札幌に入る料金所の前で渋滞している。通行止めになったらしい。高速を下りなければならぬのかと憂鬱な気分になっていると、前方の車が通行規制の係員に何か尋ねている。しかし、また元の車列に入ってそのまま進んだ。私も状況を確認しようと窓を開けて係員に問い合わせた。係員が「一寸待ってください」と無線で連絡をとっている。すると三角コーンを避けながら「通っていいですよ」と伝えてくれた。私の車両が先頭だ。高速道をひた走った。制限速度は50kmから80kmに変わっていた。

家に戻ってからいただいた賞品をテーブルに載せると、孫がビリビリと包装紙を破った。子どもの玩具が出てくるはずもなく、最後は婆一ばあ任せてしまった。婆一ばあの方も包装紙をビリビリと破いていく。こんなところは孫と同じなのだ。山田親子ばかりでなく、孫の仕草を見る度に婆孫はこうも似るものなのかと再び感心してしまった。包装紙の中身はメンミ、ケチャップ、サンマ缶、味噌、蘭越米などが入っていた。女房に言わせると蘭越米は今評判でなかなか手に入れるのが難しいのだそうだ。どうも奥さんが喜ぶようなものを賞品にしているらしい。すると女房が「今、切らしていたマヨネーズだけはなかった。」と宣った。